

## 植村利男先生を送るに寄せて

経済学部長 須 永 隆

「ついに植村先生を送ることになってしまったのか」というのが正直な感想です。経済学部の他の先生方もそう思うでしょうし、経済学部にとって、それだけ植村先生が存在が大きかったということでしょう。

植村利男先生は、横浜市立大学商学部から早稲田大学大学院経済学研究科（修士課程）を経て、中央大学大学院経済学研究科で博士課程を修了されました。昭和60年に中央大学から経済学博士の学位を授与されました。

職歴としては、昭和60年4月に本学経済学部に講師として着任され、3年後の昭和63年4月に助教授、さらに平成13年4月に教授に昇格され、現在に至っています。この間に、明治大学、東海大学、中央大学、創価大学、青山学院大学、立教大学でも非常勤講師をしておられます。教育のご専門と研究分野は、ミクロ経済学を軸とする経済政策論で、とくに研究については、「公企業目標とX効率」、「公企業の公的規制とX効率」、「公企業規制とX効率」といった論文タイトルに示されるように、1966年に北米のH. ライベンシュタインが提起した「X効率」概念を意識して、多数の業績を挙げられました。

植村先生は学会での活動も多彩であられました。日本経済政策学会、公益事業学会、金融学会、国際公共経済学会、日本交通学会、日本地域学会・太平洋地域学会、日本計画行政学会、応用地域科学研究会、廃棄物学会、環境経済・政策学会、公共選択学会、経済社会学会、日本経済学会、経済学教育学会、日本NPO学会など多方面の学会に属され、とりわけ日本経済政策学会と公益事業学会では理事として活躍されました。これだけの諸学会に長期にわたり属されたということは、植村先生の学問的関心が実に多方面に渡っていたことの証左でもありましょう。

ところで、振り返りますに、植村先生の教育研究の軌跡におかれては、どうしても忘れることのできない方がおられたと思われまます。平成15年5月6日に69歳で病のために逝かれた加藤壽延教授（人口論）の存在です。植村先生は中央大学の先輩にもあたる加藤教授のもとで経済学部スタッフとなり、研究者としての手腕を磨かれたと拝察します。一時期まで、経済学部では経済プロジェクトが組まれており、その中のひとつ「経済政策のフロンティア・プロジェクト」（代表、加藤教授）のメンバーとして、先生は研究を続けておられました。加藤教授にとっても植村先生は寵愛の弟子であり、先生のことをいつも気にかけておられた様子が目に浮かんできます。

植村先生は大学の行政面においても大いに活躍されました。平成21年4月から3期にわたり6年間、学部長の役職にあり、さらに平成27年4月から平成29年3月末まで経済学研究科委員長の要職につかれました。この期間はちょうど、熊倉修、川畑壽、菊池威、戸沢行夫、名取昭弘、橋本泰明の各教授が定年を迎える時期と重なり、新たな方向性を模索しつつ、学部の世代交代の重要な

エポックの舵取りに力を注がれました。

令和3年4月以降、学内において、また当然のことながら、経済学部教授会においても、植村先生の姿をお見かけすることができなくなるのは、なんとも寂しい、悲しい想いがいたします。先生が去られるのは亜細亜大学経済学部の一時代が終わることの象徴であり、次世代の若い教員に新たな奮起を促すことを意味するのであります。

いまここに、学部代表として、「植村先生、永い間、経済学部の維持と発展にご尽力いただき、本当にありがとうございました。お疲れさまでした」とお伝えしたいと存じます。学部を去られたあと、どのような場所で活躍されるのかはまだ伺っておりませんが、これからも健康を大切にされて、遠くから経済学部の進路を見守ってくださることを期待しております。